

琉球大学学術リポジトリ

看護師の視点に立った音楽療法の効用：女子南I 病棟における音楽療法プログラムの実態調査より

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部音楽科 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: シャイヤステ, 榮子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33186

看護師の視点に立った音楽療法の効用

—女子南Ⅰ病棟における音楽療法プログラムの実態調査より—

琉球大学教育学部音楽教育教室

シャイヤステ 榮子

国立療養所琉球精神病院の音楽療法は女子西病棟で看護師たちによる日課活動の一環として昭和48年(1973年)に始まった「コーラス」が、その年に採用されてきた心理士島袋安行によって音楽療法プログラムへと発展していった。その成果は院内の看護師らによる病棟内研究として発表された。沖縄県内の精神科における音楽療法の研究発表第一号である。その女子西病棟でのプログラムは昭和56年(1981年)11月に幕を下ろした。

しかし、新たなる病棟内での音楽療法のプログラムが同じ病院で、女子南Ⅰ病棟で昭和60年(1985年)2月から始まった。その音楽療法のプログラムは精神科医石田芳子が心理士島袋安行と共に立ち上げたのである。県内で初めて医師が中心となって実践したプログラムであった。

女子西病棟の音楽療法プログラムは、心理士が中心となり実践し看護師らが成果発表をしたが、女子南Ⅰ病棟の実践は、看護師一人によって再び、病棟内研究として発表された。看護師新里美津子は、看護の視点から音楽療法の効用を分析し発表した。

本論文では、新里看護師の研究発表を検証しながら、看護側からの音楽療法プログラムの意義を探求していく。

南Ⅰ病棟の音楽療法プログラム

国立療養所琉球精神病院の女子南Ⅰ病棟は、昭和59年(1984年)7月1日開棟した。長期在院患者が大部分を占める慢性女子閉鎖病棟であった。昭和60年2月時点での入院患者は、統合失調症39名、躁鬱病4名、てんかん2名、老人性うつ2名、そして病名不明1名の計48名で、平均年齢45才であった。

昭和60年2月から、石田芳子医師と島袋安行心理士と病棟のスタッフのサポートによる音楽療法プログラムが病棟食堂で始まった。毎週火曜日午後2時から3時まで実施した。終了後は、心理士と当番の看護師が参加者一人ひとりの音楽療法参加行動評定記録を書き入れ終了した。

プログラムは合唱、リトミック、リズム体操、そしてリクエストタイムの順序で構成された。石田医師がプログラム全体を計画し、石田医師はリトミックや合唱の伴奏をキーボードで、リズム体操はボランティア参加の瀬名波榮子が流行歌に乗せての打楽器演奏を中心に指導した。心理士の島袋が患者からのリクエストタイムの曲をギターで伴奏した。

音楽療法プログラムの位置づけ

女子南I病棟では、「音楽のもっている情緒的特質を十分に活用することによって、個人の内面世界に働きかける」心理療法として音楽療法を捉えた。音楽は人を鎮静し奮起させ、患者は自ら歌い演奏することによって自己を表現し抑圧された感情を発散させる。島袋らの女子西病棟での先行研究（昭和52年）により、音楽を媒体としたコミュニケーションが、治療者と患者との人間関係の形成に非常に有効であるということを病棟内で共有していた。

この様な音楽療法の効用を病棟内の看護師らが確信する事で、医師を中心とする音楽療法チームの実践が始まったのである。その中で、このプログラムに積極的に関わっていったのが新里美津子看護師だった。

新里美津子の研究の目的と方法

新里は、音楽療法というプログラムの場を患者と共有することは、患者が何を欲し何を考えているのかを理解する一助になると期待していた。そして、音楽療法の時間に構築された信頼関係は看護師の日々の患者への援助や理解に繋がり、より適切な看護の提供へ繋がるであろうと研究を始めた。

まず、音楽療法を患者がどのように受け止めているのかをアンケートで調査し、次に、作業療法と音楽療法への参加者数を比較する事で音楽療法への関心度を調査した。調査は昭和60年2月から62年3月までの2年間の音楽療法プログラムに対して実施された。アンケートは瀬名波によって作成された。

〈アンケート調査内容と結果〉

アンケート調査は、入院患者全員に対して個人面接方式で実施した。

質問内容は、

- ① 歌を歌うのは好きですか？
- ② 曲に合わせてリズムを取るのは楽しいですか？
- ③ 楽器（カスタネット、鈴、タンバリン）を使ってリズムを取るのは楽しいですか？
- ④ 音楽療法に参加してどう思いますか？
- ⑤ テレビ・ラジオ等の音楽番組を見たり聴いたりしますか？
- ⑥ 好きな音楽番組の種類は何ですか？
- ⑦ 音楽療法の日は楽しみですか？
- ⑧ 音楽療法に参加することによって日々の生活に変化がありましたか？
- ⑨ 音楽療法に対して希望がありますか？

以上の9問で構成された。

質問①は合唱等の歌唱に関する質問である。75%の患者が歌を歌うのが好きで25%は好きではないと答えている。質問②は音楽に合わせて身体を動かすリトミックについての質問である。75%の参加者が楽しいと答え、25%が楽しくはないと答えている。質問③は流行歌に合わせてカスタネットや鈴等の打楽器でのリズム演奏についてであった。77%が楽しいと感じ、15%が嫌だと答えている。8%は好きでも嫌いでもないと答えている。質問⑦では、65%が音楽療法のある日を楽しみにしていると答え、19%が楽しみでは無く、16%の参加者はどちらでもないと答えている。

質問①から③の意識調査では、大半の患者が歌を歌ったり、音楽に合わせて身体を動かしたり、演奏したりするのは楽しく好きだということである。そして、ほとんどの患者が音楽療法の日を楽しみにしているという結果が出ている。

質問④は、音楽療法に参加する事でどのような気持ちになるかを重複回答方式で調査したものである。選択肢として、楽しい、気持ちがいい、さっぱりする、昔を思い出す、イライラする、気分が悪くなる、そして疲れる の7つを用意した。

41.6%が楽しい、31.1%が気持ちいい、20.8%がさっぱりする、18.8%が昔のことを思い出す、12.5%がイライラする、6.3%が気分悪くなる、そして10.4%が疲れると答えていた。音楽療法への参加は、全体の雰囲気から楽しく気持ち良いものと感じた患者と、大勢で思いっきり声を出して歌いカタルシス効果によって気分がさっぱりしたと感じた患者、そして音楽が過去の出来事を思い起こさせた回想的効果を体験した患者もいた。しかし、音楽療法に参加して、イライラし、気分が悪く、疲れたと答えた患者も約10%前後いた。

質問③では、好きな音楽の種類を選択してもらった。重複解答方式である。患者の好みの音楽は、1位が歌謡曲(48%)、2位が民謡(29%)、3位が童謡(20.8%)、4位が懐メロ(18.8%)、5位がクラシック(6.3%)、そして6位が琉球古典音楽(2%)の順になった。複数回答であるが、27%の患者が特に好きな音楽は無いと回答をしている。

平均年齢が45歳の女子病棟である。幼少期に歌った童謡、地域で三線とともに親しんだ民謡、そして最も好まれたのが青年期に親しんだ歌謡曲や懐メロである。しかし、西洋クラシック音楽と琉球古典音楽には親しみがあまり無いようである。

質問⑤の結果では、公共放送での音楽番組を見たり聴いたりしている患者が79%もいる。という事は、質問③で特に好みの音楽がないと回答した26%の患者は実は音楽を受身的に聴いているだけで、自ら音楽を積極的に選択しながら聴いているのではないと解釈できる。

質問⑧は、音楽療法に参加する事で日々の生活に変化が現れたかを自由に記述してもらった。明らかに、週一回の音楽療法は患者の日々の生活に変化があると答えている。音楽療法への参加は、①毎日が楽しく、②賑やかになって嬉しい、③毎日が元気になる、④歌うことによって安らぎを得られたという返答が得られた。しかし、一生懸命掃除したとか、泥棒がいるとか、沢山の人が対立するので行きたくないという記述もあった。

質問⑨では、音楽療法プログラムに対する希望を自由に書いてもらった。民謡を歌ってみたい、出来るだけ流行歌を教えて欲しい、音符も教えて欲しい、楽しい歌も教えて欲しいと要望が出された。それらの意見には音楽療法プログラムに対する意欲と期待が感じられた。

〈アンケート調査から見える音楽療法の成果と課題〉

アンケート調査を行う事により、音楽療法プログラムに対する患者の感じ方や受け入れ方を把握することが出来た。

プログラムの成果と課題は、

- ① 多くの患者は歌が好きで、歌ったり楽器を演奏したり身体を動かす事を好きだと答えている。その結果、音楽療法の時間は楽しいもので、気持ちが良く、気分をスッキリさせる。更に、週一回の音楽療法への参加は毎日の生活に変化を与えているとアンケート調査で証言を得ることが出来た。
- ② 音楽療法に参加すると、「一生懸命掃除をした」、「泥棒がいる」、「沢山の人が対立するので行きたくない」と答えている患者がいた事から、音楽療法の時間を患者と共に過ごす事で、患者の被害妄想や脅迫概念等の精神症状を観察する場を得ることが出来た。
- ③ 患者からのリクエストで歌う時には、その患者の生きた時代や経験、そして病気の程度や症状をも読み取る事が可能となり患者理解をより深めることが出来た。
- ④ 患者たちの音楽の好みを知り得たことは、患者のプログラムへの参加意欲を高め、更なる音楽療法プログラムの活性化に役立つと感じている。プログラムに参加することで神経質になったり、疲れたり、気分が悪くなったりする患者にはプログラム内容や選曲を検討し、患者の好きな曲を多く取り入れることによって解決できるのではないかと新里は指摘している。

看護師の視点に立った音楽療法の効用

新里は、国立療養所琉球精神病院女子南Ⅰ病棟の音楽療法プログラムを看護師の視点から2年間参加し観察した。看護師として患者の内面世界をどれだけ把握し理解できたかは疑問であると言っている。2年間という時間で、慢性長期入院の患者らの音楽療法の治療効果を求めるのは難しいと結論づけたが、アンケート調査の分析から、音楽療法プログラムの成果が確実にあることは実証出来たとしている。音楽療法は患者理解を助け、患者と看護師との関係作りには効果を認めることができると実感していた。この研究発表の最後に、新里は今後も看護の立場より音楽療法プログラムへ携わって行きたいと締め括っている。

この女子南Ⅰ病棟の音楽療法プログラムは、1988年に石田芳子医師の退職に伴って終りを迎えた。

参考資料

新里美津子 (1987) 「音楽療法に携わっての一考察—南 I 病棟」

国立療養所琉球精神病院女子南 I 病棟内看護師口頭発表。

島袋安行 (1979) 「音楽療法の試み—女子西病棟における過去 5 年間のまとめ—」

沖縄心理学会第 2 回発表大会口頭発表。